

ミツカン水の文化センター・WP

タイトル 「庄内川水系における多自然型河川と里川の可能性」

キーワード 住民が関わり、集う川辺・水辺づくり

レポーター 吉田 稔

1. 自分流里川の視点

里川の発想は、私たち「ミツカン水の文化センター」企画会議の中で、飛び出した言葉であるが、その背景は、人々にとって川が遠くなってしまっていて、川の姿も戦後の急速な高度成長経済の進行に合わせて、治水優先の河づくりが進められた。

その結果、河川は3面張りコンクリート張りに改修され、人々が近づきにくくなり人口増加は、河川の周辺まで住宅開発が進んで、各家庭からの排水が河川に流されて、河川の汚染も進みますます、汚された河川に人々は近寄らなくなった。

河川の周辺に住む人たちが、その河川に近づかなくなると人々は次第に河川への関心が遠くなり、やがては、河川の現状、ゆくすえに対しても無関心になってきた。かつては、川の水は生活の水として使われ、子供の頃から川と川の周辺で様々な遊びや行事が体験できた。

自分なりに「里川」を考える前提として、かつての川と人との関係をそのまま復元するのではなく、人々の心の中で「身近な川、身近な川辺、身近な水辺、あるいは川地域として、親しみのある川」とは、「どんな川か」を探求していきたい。

そのための自分流要件としては、

- ① きれいな川——川へ入る場合に躊躇しない程度
 - ② 自然のある川——川底はコンクリートでなく、3割以上緑がある堤。
 - ③ 心に残る川——住民の半数以上が想起できる川
 - ④ 住民が集う川——散歩、ジョギング、休息、サイクリング、川遊び
 - ⑤ 清掃したくなる川——自分の家のように、庭のように感覚
- ①～⑤までの川である要件は、様々ではあるが重要な要件としては、

都市の中にある川



自然に恵まれ、きれいな川



人々が集いやすくなる



汚ればきれいにしたくなり



幼い頃からそうならば心に残る川になる

以上の視点で自分の周辺を見回したとき、愛知県の都市河川「庄内川流域及び水系」の中で「里川」のヒントがないか研究してみようと思いたちました。また、水の文化センターに関わりあってから、ミツカンの地元東海地区の河川の関係者への交流も広め、その方からの意見も伺いながら、公私民の三者がネットワークを共有した「川コミュニケーション」作りが「里川課題」ではないかと考えました。多自然型工法の川づくりは、そのような人たちから感化されたところもあります。

関わりあった人たち

- ・ 本守真人－前愛知県建設部技監、愛知川の会顧問
- ・ 井山 聡－愛知県建設部河川課長、国土交通省出向
- ・ 山田厚志－ナッツプランニング社長、近自然工法研究会主宰
- ・ 国村恵子－名古屋水辺研究会代表、愛知最大の川体験、調査活動グループ
- ・ 飯尾 歩－中日新聞論説委員、環境問題専門
- ・ 山脇正俊－近自然工学研究家、チューリッヒ大学講師、在スイス

2. 庄内川水系と多自然型川づくり工法

1) 庄内川水系

庄内川は、岐阜県恵那郡山岡町の夕立山（標高 727m）を源とし、陶器の都市「多治見・瀬戸」市、衛星都市「春日井」市、人口 200 万の「名古屋」市を流れ、名古屋市港区から伊勢湾に注ぐ典型的な都市河川である。

庄内川の名称は、現在でも岐阜県側では「土岐川」と呼ばれ、愛知県では庄内川と呼ばれています。しかし、その中間部分定光寺を中心として左右数キロでは「玉野川」とも呼ばれています。

歴史的にも、江戸時代以前は主な流域地名で「土岐川、玉野川、勝川、庄野川」等と呼ばれていたが、尾張藩初代城主「徳川義直」が尾張北部流域の各庄を流れる川ということで「庄内川」と命名された。正式には、明治時代に入ってから愛知県内について「庄内川」に統一された。

※ 庄内川水系のデータ

幹川流路延長	96 k m
流域面積	1010 k m
主な支川数	17 河川
流域人口	2 4 0 万人

庄内川は一級河川であり、国の管理であるが一部住人の要望もあって、地域住民が親しむためのワンドを大きくした自然に近いビオトープを造成した。が 4 年前の東海豪雨によって流出した。

2) 庄内川水系・多自然型川づくり工法の事例—本守前技監談

①生地川（八田川支流）

河道貯留をかねた多自然河川公園の施工⇒当初地元外の NPO 団体が維持、清掃等の活動を行なったが、継続が難しくなっている。

②蛇ヶ洞川（水野川支流）

オオサンショウウオの生息河川であり、その保護を目指して護岸修理を行う。植生ブロック、巢孔ブロック構造を施工

⇒オオサンショウウオ、ゲンジボタルの保全活動（町内会）・NPO「名古屋市水辺研究会」が支援し、比較的活発。

③香流川（矢田川支流）

愛知県として最初に手がけた河川あり、遊歩道、緑地河川岸などの整備がされている。しかし、香流川に関わる市民活動はないが水質は過去10年改善されている。庄内川水系ではもっとも都市化が進んだ地域であり、興味深い河川である。

3) 土岐川・庄内川流域ネットワーク—井山課長、庄内河川事務所

多自然型の取り組みは、最初に紹介した「ビオトープ」造成程度しか見られず、流域ネットワーク作りは、国土交通省「庄内川河川事務所」が中心となって河川流域住民の参加意識を高め、川との関わりを深める事を意図している。

その為の運営部署として「流域連携課」を設置している。

平成15年秋からネットワーク機関誌「土岐川庄内川こんにちは」を発刊し、活動情報の共有化を狙う。流域の主な活動

① 庄内川をきれいにする会（守山区）

- ・ 昭和 49 年発足・会員数 250 名
- ・ 食べられない魚釣り大会と魚類調査実施（毎年）

②志段味の自然と歴史に親しむ会（守山区）

- ・ 昭和 59 年発足・会員数 100 名
- ・ 庄内川流域、湧き水、湿地をフィールドし史料的研究、観察会の月例会実施。

③瀬戸サンショウウオを愛する会（瀬戸市）

- ・ 平成 11 年発足・会員数 80 名
- ・ オオサンショウウオの保護活動、蛇ヶ洞川の動植物観察会

④みどりの会（多治見市）

- ・ 1984 年発足・会員数 30 名
- ・ 土岐川周辺の自然観察会

⑤ 土岐川観察館（多治見市）：12/7 宮島代表面談（多治見さかなの会）

- ・ 多治見市 人口 11 万人、03 年環境都市 NO 1 に選ばれた。

- ・2002年多治見市、国土交通省、市民団体が設立。
- ・庄内川水系では、もっとも活発な活動を展開しているNPOである。
- ・30坪の事務所兼、「水族館（土岐川のすべての魚を生育）」職員3名
- ・自然教室、土岐川河川情報提供、「子どもガサガサ探検隊」実施し、企画行事として、年間100回以上、のべ参加者数は、1万人を数える。

（面談2時間の間に下校途中の小学生が4~5人立ち寄る。）

これらの活動が住民参加あるいは、住民が川に親しむために何らかの手助けになっているが、もっとも活発である「多治見観察館」を中心に調査。

その結果、このような活動が河川に対して親しみを覚え人々が集まってくる要因になりうるか検証してみるが、やはり、多治見の取り組みが現時点では、もっとも進んでいる事例である。

4) 庄内川水系から香流川へ

庄内川は、その流れのほとんどが名古屋市の北部郊外から南西部郊外に沿って流れる、愛知県では木曾川に次ぐ大きな河川である。

里川をより都市に近い川として自分流に捉えるならば、庄内川水系の中で名古屋市内の都市河川から、「里川」の研究対象を見つけ出したいと考えました。

名古屋市内における庄内川の最大支流は、矢田川である。矢田川は名古屋市北区付近にて庄内川と分かれ、尾張旭市、守山区、瀬戸市を経て猿投山を背後に見ながら、東京大学愛知演習林「赤津研究林」を沿うように源流部にいたる。（全長40k）この矢田川の間中部あたりから、「香流川」が枝分れしている。

ちなみに、名古屋市内の典型的都市型河川であり、市民にとって身近な河川を列挙してみると

- ・「山崎川」 名古屋市東部住宅地の中心を流れ、堤の桜が名所
- ・「天白川」 さらに東部の新興住宅地域を流れ、比較的流域活動は活発
- ・「香流川」 名古屋北東部の旧、新住宅地域を流れ、ほとんど活動なし
- ・「堀川」 名古屋繁華街を流れる運河、1612年福島正則によって完成
名古屋の河川活動のもっとも「旬な川」

※この中で、「香流川」と「堀川」が庄内川水系である。

このような状況のなかで、自分の住んでいる千種区も流域であり、一番活動が少なく「香流川」という名前が気に入った事が、研究テーマとする要因です。また、話を聞くうちに、この「香流川」が本守氏の県事業として、最初に「多自然型川づくり」を手がけた川であったことが判明、ますます、最適な河川と思いが入る。

研究の初年度は、とにかく「香流川」の歴史と現在を見て、歩いて、調べながら「里川」の可能性を手繰ってみました。

